

思い出の動物たち（5）

～ノラからランへ～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



今回はイヌがトラの子を育てた思い出ばなしだ。子育てのできなかったトラが産んだ子をイヌが育て、その子が後に子育てのできるトラに成長したという、違う動物間であったこの物語は、学研「1年のかがく」の1983年6月号にも掲載された。

まずは、登場動物の紹介から始めよう。九州のとある動物園で生まれた「ミドリ」は生まれてすぐ人の手で育てられたトラであった。大森山動物園の開園に合わせ搬入され、よく人に慣れていていたが、子を産んでも育てることができなかった。当時、ミドリが出産すると子にミルクを与えるため私たちは園に寝泊まりした。

そんなある日のこと、動物園に脚を骨折したイヌが運び込まれてきた。弱ったイヌを見捨てられず勇気ある行動を取ったのは動物園近くの秋田市立浜田小学校の児童たちだった。皆で力を合わせ園に運び、モジモジしながらも「イヌが脚を怪我しているみたいです。助けてくれませんか？」とお願いに來たのだ。子供たちのやさしさに応えるため、動物園で預かり手術し治してあげることにした。それまで園で飼育した。人なつっこく、利発そうなイヌは皆に「ノラ」と呼ばれ可愛がられた。事務所のマスコットの存在にもなり、来園者にも人気だった。

そんなノラだったが、ある日ふと気づくと姿を消していた。怪我也治り飼い主の所にでも帰ったのかなと思ったくらいで、ノラのこととはやがて頭から消えていた。

そんな頃、ミドリの何回目かのお産が近づき、

私たちは人工保育の準備を始めていた。その時、忘れていたノラが大きなお腹で「動物園で子どもを産んでもいいかしら」とでも言いたげにヨタヨタと戻ってきたのだった。ノラはすっかりその気だったのだろう。

ノラのお産の準備もしながら、あることを考えた。ミドリとノラ、出産のタイミングが合うならば、ミドリの子をノラに預けてみようと。人が育てても子育てのできないトラになってしまいかねない。イヌに育ててもらうことで人にはできない大事な何か、動物の親が子に対して取る親身で献身的とも表現したくなる態度、親のやさしさや厳しさをミドリの子に体感させてみたかった。それは動物の子が受けるはずの本物の育ちの体験、自然の仕掛けと言い換えてもいい。生き続ける上で大事な「いのちのリレー」を実際に体験してもらうことで、本物の親トラに成長して欲しいという願いを込めて。

偶然にもノラの出産翌日、ミドリも子を産んだ。ノラに預けたのは雌の子、動物の子育ては雌がするからだ。残る子はいつものように人工で保育した。

出産時はどんな母動物でも神経質になる。人慣れし、利発なノラでも、自分が産んだ子イヌにはほかの子が侵入すれば異物と見なしガブリと一撃を加えかねない。いくらトラの子でもイチコロだ。不安だったがノラを信じて実行した。

子トラを預けた時のノラの様子を今でも思い出す。自分が産んだ子の中に、いきなり匂いの違う、大きな縞模様の子が出現したのだから、



「なんじゃこれは??」とノラは戸惑うばかり。ノラはトラの子が混じった子イヌの周りをうろたえた様子でぐるぐると回っていたが、お乳を求めうごめく子イヌが気になり「お母さんはここよ」と安心させようと、やがて子イヌを舐め始めた。そして、何を思ったのか紛れ込んでいたトラの子にも同じ態度を取ったのだ。「えい、まとめて面倒見てあげましょう」とでも言いたげに。そしてノラは体をゴロリと横にし、子らに乳を与え始めたのだった。

トラの子もイヌの子も子は皆同じ。求めるのは暖かな母とお乳。子は皆、お乳にありつけた。ノラはトラの子も受け入れてくれたのだ。母の乳房、胸に子を誘う自然の仕掛けは実に巧妙、教えずとも子は求め、親が見せる愛育の態度とともに絆が育まれてゆく。哺乳ピンの乳首に吸い付かせる苦労はいらない。

ノラは子らにお乳を与え、飲み終わると子らのお尻を舐め排泄を促し、そして暖かな胸でひと時の安息をあげた。ノラのマザーリングは実に申し分ないものだった。

次の日の朝もノラの子、ミドリの子、皆元気な様子で、ひとまず安心した。トラの子をノラは我が子のように扱い、子イヌは同胞として戯れてくれた。当時、キャンディーズの伊藤蘭ちゃんが大人気でミドリの子は「ラン」と名づけられた。ランちゃんは子イヌと仲良く遊び、同時にノラの愛をたっぷりもらい育った。

お腹が空けばお乳を求め、時にノラの乳首を強く噛んでノラからこっぴどく叱られもした。ノラは、お乳をあげ、舐めては愛を与え、寒ければ子をお腹に寄せた。ただそれだけだったが、たっぷりの愛に満ちていた。ランはノラに愛され子イヌといっしょに成長したが、少しずつトラの片鱗、強さも見せ始めた。生後1か月半ほどで、ノラの食べこぼし、いわゆる離乳食を食べ始めるとみるみる成長、3カ月ほどでノラと同

じ位になった。ランはノラに遊んで欲しくじゃれつくが、流石のノラも悲鳴を上げるようになった。子トラのパワーは子イヌの比ではなかった。ランはノラから離さざるを得なくなり、猛獣舎に移された。成長し子をもうけた時、自分の産んだ子をちゃんと育てるトラになってくれることを願い、皆はランを大事に育てた。

時が経ち、年頃になったランは雄と一緒にになった。ノラのたっぷりの愛を体感したランはきっといい母トラになるだろうと期待した。ランは身ごもりやがて出産の日がやってきた。私たちは固唾を飲んで見守った。しかし、ランの子に対する態度は予想外だった。子に時折関心を示し、舐めたりもしたが、お乳を飲ませなかったのだ。きっとできると見守り続けたが、変わらなかった。ランはどこか落ち着きがなく、結果的に子は次々と死んだ。後の2回目の試みでも悲しい結末だった。

動物種の隔たりでの愛の質が違うのか、育てられた時間の短さでの愛の総量不足なのか、ノラの愛はランに通じなかったのだろうか。もう無理なのではとの意見も出された。だが、ここで手を出せばまた元の本阿弥だという思いもあり、ランの母性を目覚めさせるため、再度の挑戦をすることで皆がまとまった。

3回目の出産の朝、ランの産室をそーっと覗いた時、胸を打たれる、感動的な光景がそこにあった。ランは3頭の子を自分の腹に寄せ、お乳を飲ませていたのだ。「どう、私もお母さんになったのよ」、ランの凛とした誇らしげな姿は、母の強さと美しさそのものだった。私たちも救われた。「すごいぞ、ラン!」と心の中で叫んだ。ランはその後、3頭の子を立派に育て上げたのだった。

愛育の心は種を超越し、イヌのノラからトラのランにリレーされたのだろう。子育てにある普遍的な愛や母性を考えさせる物語だった。